

北京図書館所蔵『広異記』抄本について

溝部良恵

一 はじめに

『広異記』は、中唐初期に戴孚によって書かれた文言小説集である。そこには、物語性に富んださまざまな鬼や狐の話が記されており、後代の文言小説に与えた影響も大きい重要な本である。作者戴孚は、至徳二年（七五七）に進士となったが、最終的には一地方官吏として生涯を終えた人である。そのため正史などには、その名を留めていない。当時の著名な詩人であり、戴孚と同年に進士となった顧況によって書かれた「戴氏広異記序」『文苑英華』巻七二七・『全唐文』巻二二六所収）が、戴孚の一生を伝える現存の唯一の資料である。

『広異記』原本も早い時期に失われた。『新・旧唐書』をはじめとする正史の経籍史、芸文史、その他の書目にもほとんど名を留めていない。原本は失われて見ることができないが、「戴氏広異記序」によれば、この書は「此書二十卷、用紙一千幅、蓋十餘万言」からなるものであったという。現在では『広異記』の逸文として、『太平広記』に残されている三百条あまりの話と清代に流通した六巻本の抄本があることが知られている。この六巻抄本は明末清初に突如として、複数の蔵書目にその存在が記されるようになった。そのうちの二本は、現在、北京図書館に所蔵されている。

筆者は修士論文においてこの『広異記』を取り上げた。その際には六卷抄本を見る機会はなく、中華書局の排印本『広異記』を底本とし、さらに李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』²を用いて検討を加え、『太平広記』を中心とした三百二条を『広異記』の逸文と考えて論を進めた。その後筆者は一九九六年九月から一九九七年七月にかけて北京大学に留学する機会を得た。この期間に筆者は、北京図書館新館、旧館において、六卷抄本を調査するとともに、その他に、三種類の『広異記』抄本を発見することができた。また留学期間中に、『太平広記』の版本に詳しい人民大学張国風氏に何度か助言をいただき、唐代小説を研究する際のテキストの問題について学ぶことができた。そこで本論文では、これらの留学における成果を踏まえ、現在在北京図書館に所蔵されている『広異記』三種五本の抄本の内容について調査した結果を整理するとともに、唐代小説のテキストの問題について考えてみたい。

まず現在に至るまでの『広異記』のテキストの流伝について、先行研究をもとに簡単にまとめる。

一般に中国の旧書は、原書が失われ、見ることができなくなるとも、その書がどのように流伝し、失われていったかは各蔵書目を調べることによってある程度明らかにすることができる。しかし『広異記』は、『新・旧唐書』以下の歴史書の目録、あるいは『直齋書録解題』以下の個人の蔵書目にもほとんどその名を留めない。李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』附録「宋元十種目著録対照表」によれば、宋元の代表的な書目のうち『広異記』の名を載せているのは、唯一南宋紹興年間編の『秘書省統編到四庫闕書』のみである。その記述によれば、「載孚撰広異記一卷闕」とあり、北宋の時点ですでに二十巻の原本は失われ、一卷となり、南宋ではそれも失われてしまっていたことがわかる。

明代の書目の中では、明末の蔵書家趙用賢（一五三五—一五九六）『趙定字書目』に『広異記』の名を見いだすことができる。『趙定字書目』の中で、『広異記』は、『稗統統編』という叢書の中の一冊として記されているが、記述は「広異記二本」という簡単なものであり、刻本なのか抄本なのか、具体的な内容などはわからない。『稗統統編』自体も現在では失われ、見ることができない⁴。このように明代までの『広異記』の流伝について、現在確認できるこ

とはわずかである。しかし明末清初になると、複数の書目に『広異記』の名が現れるようになる。それは以下の通り。

書目1 錢曾『也是園藏書目』卷二冥異 広異記六卷

書目2 錢曾『述古堂藏書目』卷二小説家 広異記六卷抄

書目3 錢曾『讀書敏求記』卷二 広異記六卷⁽⁵⁾

書目4 毛扆『汲古閣珍藏秘書書目』広異記三本 綿紙舊抄 徐中堂借去抄中有票籤中堂筆九錢

書目5 陳揆『稽瑞樓書目』卷四 広異記六卷旧鈔一冊

書目6 瞿鏞『鉄琴銅劍樓藏書目』卷十七 広異記旧鈔本

書目7 黄丕烈『蕘圃藏書題識叙録』広異記明刻本

書目8 『涵芬樓燼餘書録』付『涵芬樓原存善本書目』広異録旧鈔本 黄蕘翁跋

書目9 莫友芝撰・傅增湘訂補『藏園訂補 亭知見傳本書目』卷十一 子部小説家瑣記 補広異記六卷 不著撰人名

氏。○清寫本。有黄蕘翁跋。蟲傷過甚。涵芬樓藏。余曾借校。⁽⁶⁾

書目10 『北京図書館古籍善本書目』子部小説家類 広異記六卷清抄本 周星詒校並跋蔣鳳藻跋 一冊 十行二十字無格

書目11 『北京図書館古籍善本書目』子部小説家類 広異記六卷 清抄本 一冊 十行二十字無格

これらの蔵書目の記述を見ると、書目7の黄丕烈の蔵書に明刻本の記述がある以外は、すべて抄本、ほとんどが「六卷抄本」であることがわかる。錢曾（一六二九—一七〇二）、毛扆（一六四〇—一七一三）といった清初の蔵書家の書目に載っていることから、この六卷抄本は明末から清初にかけて編まれ、広く流通していたものと思われる。そして現在では、そのうちの二本が北京図書館善本室（新館）に残されている。（書目10、書目11）

この二本については、すでに流伝、出典を中心とした調査結果が、杜德橋「広異記初探」⁽⁸⁾で紹介されている。またこの他に清末民初に『広異記』二十巻が存在していたことを示唆する記述が、原本『説郛』にある。それは、

原本『説郛』巻四に収められている『広異記』五条の最後につけられた「宗祥案後二則二十巻本未見」という注である。「宗祥」とは、一九二七年に当時現存した六種類の『説郛』の明抄本を校合し、出版した張宗祥（一八八二—一九六五）である。この案語によれば、張宗祥は『広異記』の二十巻本を見ていたことになる。また杜德橋氏は、上記の論文において、繆荃孫編『清学部図書館善本書目』に以下のような記述があることを指摘している。

「広異記 二十巻 唐戴孚 精鈔本 有汪士鐘藏朱文長印」

しかし杜德橋氏も二十巻本そのものを発見するには至らず、清末民初に存在していたと考えられる二十巻本は、その後研究者の目に触れることはなかった。排印本『広異記』「輯校説明」（方詩銘）、李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』においても、この二十巻本の存在については、否定的な見解が示されていた。⁹⁾

以上が、先行研究をもとにみた『広異記』の流伝状況である。

そしてすでに述べたように、今回筆者は、北京図書館新館善本室、旧館普通古籍室において六巻抄本（書目10、書目11）を調べていく過程で、この二本の六巻抄本の他に、新たに三種類の『広異記』抄本を発見することができた。それは、明抄本『広異記選』（百麓洞抄本『雜抄五種五卷』の二）、書目10、書目11とは別のもう一本の六巻抄本、¹⁰⁾『清学部図書館善本書目』に記された二十巻本である。

まず従来知られてきた二本の六巻本、新しく確認した三本、合わせて五本の『広異記』の1流伝および形態から推測される流伝の状況2内容3所蔵4備考を以下に整理する。

二 『広異記』各抄本の内容

I 『広異記選』（以下便宜上、百麓洞抄本と称する）

1 明抄本、百麓洞抄本、『雜抄五種五卷』の一行二十字白口四周單邊

蔵書印四つ「斌孫印信」「翁氏伯子」「翁斌孫印」「習齋秘笈」—翁斌孫（習齋は、翁斌孫の室名）

翁斌孫は光緒三年（一八八七）の進士であり、清末の有名な蔵書家翁同龢の甥である。翁斌孫の蔵書は解放後北京図書館に寄贈されている。この本は、その中の一本だろう。また『雑抄五種五卷』に、ほかに収録されている四種の本は以下の通りである。

餘冬録選一卷／随筆抄可一卷／吹劍録略一卷／感応編注異一卷

2 合計五十二話を収録¹³⁾。全て『太平広記』に収められている話であるが、『太平広記』の各本の間で出典の違いがある。以下の表の通りである¹⁴⁾。

	篇名・卷数	談刻本	野竹齋抄本	陳氏校本	六卷本
1	張果女・卷三三〇	出缺	広異記	広異記	巻一
2	牛氏童子・卷四〇〇	紀錄	紀聞	紀聞	巻三

五十二話中、五十一話は六卷本と同じ内容である¹³⁾。

3 北京図書館新館善本室

4 この抄本は、今回筆者が北京図書館での目録調査を通じて、発見したものである。これは百麓洞抄本『雑抄五種五卷』の中の一つとして『北京図書館善本書目』に記載していた。『北京図書館善本書目』によれば、「明抄本」とあるが、この本には、序文、跋などの材料がなく、「百麓洞」自身がいつの時代、誰の書院であったのか、現在のところ明らかにすることができない。しかし北京図書館の李致中氏によると紙質、字形から判断して、この百麓洞抄本が、明代のものであることは間違いない¹⁴⁾ことである。また話はすべて『太平広記』から収録されたものであるが、

収録順序は『太平広記』にそのまま従っているわけではない。しかし同じ巻の話が続けて何話か収録されている場合、それらの話の収録順序は、『太平広記』のその巻の中の順序と一致する。例えば目録25「崔敏慤」(巻三〇一・神)から32「李佐時」(巻三〇五・神)にかけて巻三〇一から巻三〇五の話が七話載っているが、これらはすべて『太平広記』の収録順序と一致する。しかしその前後を見ると、23「齊澣」(巻四二〇・龍) 24「李叔霽」(巻二七九・夢)、33「僕僕先生」(巻二二・神仙) 34「張李二公」(巻三三・神仙) となっており、『太平広記』の巻数どおりではないことがわかる。しかしこのような恣意的な収録の順序にもかかわらず、百麓洞抄本と六巻本に共通する五十一話については、その順序は全て一致する。これらのことから判断するとこの百麓洞抄本『広異記選』は、六巻抄本をもとに、編集された本であると考えることができる。ところが現存の六巻本a、b、cは、全て清抄本であるので、現在までに確認されているものの中では明抄本であるこの百麓洞抄本が、一番古い本ということになる。百麓洞抄本と六巻本についての関係は、以下に改めて取り上げる。

Ⅱ 『広異記』六巻本 a

1 清抄本、周星詒校並跋 蔣鳳藻跋 十行二十字無格

周星詒の跋によれば、周星詒は乙丑(清同治四年・一八六五)に福建の邵武で任官していたときに、福州の渠氏からこの書を購入した。周星詒の蔵書の多くは、その後蔣鳳藻の手に渡った。『広異記』も周星詒から蔣鳳藻に渡った蔵書の一本だったのだろう。

また蔣鳳藻の跋によれば、この六巻本は清の陸溍(字其清)の手による鈔本であるという。(此佳趣堂陸其清手鈔本也。)佳趣堂は、陸其清の蔵書の名前。陸溍は、字其清。康熙年間、呉の医者であり、かつ有名な蔵書家、抄書家であった。蔣鳳藻の跋の記述が正しいとすれば、この六巻本は、早ければ清の順治から康熙年間の抄本と推測するこ

とができる。しかし一方陸溥の蔵書目である『佳趣堂書目』には、『広異記』の書名は見られない。

またこの六巻本aには、いくつかの蔵書印が押されている。これを参考にこの本が陸溥の手元からどのような経緯をたどって、晩清の蔵書家周星詒の手に渡ったのかを知ることができる。蔵書印は以下の通りである。

「忍慮秘玩」—黄登賢

「祥符周氏瑞瓜堂図書」、「季旣」、「星詒印信」、「周印星詒」—周星詒

「長州蔣鳳藻印信△記」—蔣鳳藻

「翁斌孫印」—翁斌孫

「壹是堂読書記」—趙士錦

「長楽」—馮家蔵書印¹⁵

「長△過眼」—△は「康」あるいは「庚」

これらを参考にすると、六巻本aは、後に黄登賢（清・乾隆の進士、一七八四没）、周星詒（一八三三—一九〇四）、蔣鳳藻の手を経て、翁斌孫の元に渡ったことがわかる。趙士錦、「長△過眼」については、詳しいことはわからない。

避諱「玄」（清康熙帝）

2 六巻本aは、周星詒の校訂を経ているために、六巻本自身の内容を調べるためには、六巻本bを中心に調べるのが適当と判断とした。六巻本aと六巻本bの内容は、同一のものであるので、以下内容についての記述は、六巻本bの項を参照のこと。

3 北京図書館新館善本室。

4 六巻本bを参照のこと。

Ⅲ 『広異記』六巻本b

1 清抄本 一冊 十行二十字無格

藏書印は、「稽瑞樓」「鐵琴銅劍樓」の二つがある。そのほかには伝本の手がかりとなるような序や跋はない。

稽瑞樓は、陳揆（二七八〇—一八二五）の藏書樓の名である。陳揆には、『稽瑞樓書目』があり、その四卷に「広異記六卷 旧鈔一冊」の記述がある。

一方鐵琴銅劍樓は、瞿鏞の藏書樓である。瞿鏞、陳揆とともに、明清期に多くの藏書家を輩出したことで有名な常熟（現・江蘇省常熟）の出身である。陳揆の死後、子がなかったために、彼の藏書は維持されることが不可能となり、方々に散り散りになっていった。代々藏書家として知られた家柄であった瞿家では、陳揆の藏書の一部を受け継いだ。この『広異記』六卷本は、その中の一冊だったと思われる。瞿鏞の藏書目録『鐵琴銅劍樓藏書目録』卷十七には、「其出唐人所撰無疑，惟諸家書目俱未著錄，亦無序跋可證，不知稽瑞主人何處得之」と記されている。以上六卷本に關しては、陳揆の手にはいる以前にどの藏書家の手を経ってきたのか、以下どのような経緯を経て現在に至っているのか、詳しいことはわからない。

避諱「玄」（清康熙帝）

2 全部で百二話が収録されている。すべて『太平広記』に収録されている話である。中にはいくつが『太平広記』に書かれているものと出典の違うものがある。以下表にまとめる。また編者に關しては、手がかりはない。

	篇名・卷数	談刻本	野竹齋抄本	陳氏校本	六卷本
1	狄仁傑・卷三二九	出缺	出缺	広異記	卷一
2	張果女・卷三三〇	出缺	広異記	広異記	卷一

3	成珪・卷一一一	卓異記	広異記	無	卷一
4	牛氏童子・卷四〇〇	紀錄	紀聞	紀聞	卷五
5	南陽士人・卷四三二	原化記	原化記	原化記	卷六
6	劉巨麟・卷四三七	摭異記	広異記	広異記	卷六

1から3は、出典、内容から考えて『広異記』の逸文と認められるものである。4「牛氏童子」、5「南陽士人」については、『太平広記』の各版本において、出典がそれぞれ『紀聞』、『原化記』と記され、相違はなく、『広異記』の逸文とは認められないようである。内容の点からみても、「牛氏童子」には、『紀聞』の作者牛肅の祖先のことなどが記されており、『紀聞』の逸文と考えて問題ないものと思われる。また『原化記』所収「南陽士人」についても、各『太平広記』間において、出典の違いはない。『原化記』は、作者は皇甫氏、名は未詳。『秘書省續編到四庫闕書目』には、「皇甫氏撰原作記三卷」と記されているが、原本は伝わらず、『太平広記』を中心に、逸文が残されている。話中は中・晩唐期のものが大部分で、成立は『広異記』よりも後と考えられる。書名の「原化」とは、変化を探究するという意味であり、『太平広記』巻四二七から巻四三三にかけて七条収められている虎の話も、ほとんどが人間の化虎譚である。「南陽士人」もそのような化虎譚のうちの一つであり、『原化記』の中の話と考えられる。『太平広記』巻四三二では、前後に『広異記』六巻本に収録されている92「松陽人」93「虎恤人」の話が続いており、六巻本の編者が混同してしまったものと考えられる。

6「劉巨麟」は、中華書局本『太平広記』には、出『摭異記』とのみ書かれているが、筆者が明抄本、陳氏校本を

確かめたところいずれも『広異記』を出典としていた。『広異記』の逸文と考えてよいだろう。

3 北京図書館善本室

4 話はすべて『太平広記』に収録されているものである。収録の順序は、『太平広記』の通りではないが、同じ巻数、あるいは前後の巻数の話が続けて引かれている場合、その収録の順序は、『太平広記』と一致する¹⁸⁾。しかしこのような収録の順序や話の選び方に何か編者の意図を読み取ることは難しい。『太平広記』の分類などと照らし合わせてみても、そこから編者が何らかの基準に基づいて話を選択したとは考えにくい。例えば現在『太平広記』巻三二八から巻三三九に五十五篇残されている鬼の話のうち、六巻本には十一篇が収められている。しかし六巻本に収められた鬼の話は、巻三二八から巻三三〇に収録されている『広異記』の話そのまま全て写しただけで、「李霸」(巻三三一)、「王玄之」(巻三三四)など、『広異記』の鬼の話を代表するともいえる話は載っていない。あるいは、『太平広記』中に三十三篇も残され、興味深い話も多い狐を題材とした話は一篇も取られていない。

また出典から見ると、六巻本は談刻本と出典が異なっている場合、明抄本、陳氏校本と一致することが多い。

VI 六巻本c

1 広異記六巻 巻首有題識 無格十行二十字

巻頭には、錢曾『讀書敏求記』巻二の『広異記』に関する叙録の抜き書きと題がある。この題は、おそらく清末民初の蔵書家でこの六巻本cを所蔵していた徐乃昌によって書かれたものだろう。その中では、錢曾『讀書敏求記』の他に、徐乾学(号健庵・一六三二—一六九四)『傳是樓書目』にもこの書の名が見えることが書かれているが、管見の限りでは、『傳是樓書目』には『広異記』の名は見えない。

四つの蔵書印がある。

「歛鮑氏知不足齋藏書」―鮑廷博

「南陵徐乃昌校勘經籍志」―「積學齋」―「積餘秘笈識看宝印」―徐乃昌

「積學齋」は、清末から民国はじめの南陵の有名な藏書家徐乃昌（二八八六―一九三六）の室名である。

避諱「玄」（清康熙帝）

2 内容は、六卷本 a、b と同じである。

3 北京図書館旧館普通古籍室

4 藏書印からこの六卷本 c は、本来鮑廷博（二七二八―一八一四）の藏書であったことがわかる。

V 『広異記』二十卷本

1 有唐顧況序

顧況の序とは、『文苑英華』卷七三七、『全唐文』卷五二八に載る「戴氏広異記序」である。これはすでに述べたように、戴孚の経歴あるいは『広異記』の書かれた経緯を知ることのできる現存の唯一の資料である。この他に序や跋はない。藏書印は三つある。

「汪士鐘藏」「清学部図書室」「京師図書館蔵」

汪士鐘は、晩清の藏書家である。他に手がかりがないことから、汪士鐘の藏書となる以前のこの本の来歴はわからない。また残り二つの藏書印から、この本は汪士鐘の手を離れて、京師図書館の前進である清学部図書館に移った後、京師図書館つまり現在の北京図書館蔵となり、現在に至っていることがわかる。つまり杜徳橋氏が先の論文で指摘していた『清学部図書善本書目』子部小説家類に記載されていた『広異記』二十卷本とは、この本のことと考えて間違いはないだろう。

避諱「玄」―「元」(清康熙帝)「胤」―「充」(清雍正帝)「弘」―「宏」(清乾隆帝)「顛」欠筆有。(清嘉慶帝) 避諱からは、二十卷本が、嘉慶帝(在位一七九六―一八二〇)以後のものであることがわかる。

2 顧況の「戴氏広異記序」によれば、本来『広異記』は二十巻からなる書であった。その二十巻本は、各書目から判断して、すでに北宋の時点で失われていることはすでに述べた。では、今回北京図書館旧館普通古籍室で発見されたこの二十巻本は、失われたはずの元来の二十巻本(以下原二十巻本とよぶ。)なのだろうか。結論からいえば、この二十巻本は唐代の原二十巻本ではないだろう。なぜならば、この二十巻本に収録されている話は、合計三百三十三話。そのうち三百八話は、『太平広記』から編集されたものである。収録の順序も『太平広記』と全て一致している。残りの五話についても、『太平広記』以外の類書から抜き出してきたものと考えられる。それは以下の通りである。

① 「崔元微」『紺珠集』巻七、「白孔六帖」巻九九に、それぞれ『広異記』を出典に持つものとして、収められている。¹⁹⁾ 字句を比べてみると『白孔六帖』の方がより二十巻本に近いことがわかる。

② 「元装」『類説』巻八「摩頂松」、「紺珠集」巻七所収。両者の字句は、一部異なるところがあり、二十巻本は『類説』本を採ったと思われる。またこの玄装の話は、『太平広記』巻九十二(出独異志及唐新語)にあることが知られている。内容は『太平広記』の方が詳しい。排印本『広異記』では『太平広記』の出版を尊重し、この話を『広異記』の逸文とは認めない。一方李劍国氏はこの話を『広異記』の逸文とし、『独異志』所収の話はさらにこの話をもとに引き伸ばし、新たに書かれたものと考えている。²⁰⁾

③ 「王生」『白孔六帖』巻六六と『太平広記』巻二八二「邢鳳」、「博異記」沈亞之「各条の一部として引かれている。字句を比べると『博異記』では「王生」が「王炎」となっており、二十巻本が参考にしたのは、『白孔六帖』であると推測される。

④ 「帝女桑」『太平御覽』巻九二二に『広異記』を引用している。

	篇名・巻数	談刻本	野竹齋抄本	陳氏校本	六卷本
7	周延翰・卷二七九	広異記	稽神録	無	無
6	劉巨麟・卷四三七	擴異記	広異記	広異記	卷六
5	高生・卷三三三	宣室志	宣室志	宣室志	無
4	王果・卷三九一	出缺	出缺	出缺	無
3	楊国忠・卷三三五	出缺	広異記	広異記	無
2	張果女・卷三三〇	出缺	広異記	広異記	卷一
1	狄仁傑・卷三二九	出缺	出缺	広異記	卷一

⑤ 「鳳止棠」現在のところ二十巻本に基づいたと思われるような資料は特定できないが、①～④の例から判断すれば、二十巻本の編者が、類書の中から取り出したものと考えることができらるだろう。

このように二十巻本は、『太平広記』と各類書から話を集め、「載氏広異記序」の記述に沿って、二十巻に排したものと考えられる。しかしこの五条はいずれも各類書に引かれた時点で、省略されていると考えられ、文体の面などからは、本来『広異記』の話であったかどうか判断することは難しい。また②「元装」の話のように、意見が分かれている場合もあれば、③「王生」のように、時代から明らかに戴孚が書くのは不可能と思われるものもある。

この他に、二十巻本の中で『太平広記』から収録された話の中で、出典に問題のあるものを以下にあげる。

10	洛水牛・卷四三四	広異記	聞奇録	需読録	無
9	李思恭・卷三九〇	広異記	録異記	無	無
8	周頌・卷三二二	広異記	異聞録	無	無

3 「楊国忠」は中華書局版『太平広記』では、「明鈔本出『宣室志』」と記されているが、実際に野竹齋抄本を確認してみると、出典は『広異記』になっている。中華書局本のミスプリントだろう。また『説郛』では「楊国忠」は『蕭湘録』の話として載っているが、陳氏校本も『広異記』を出典に挙げており、『広異記』の逸文と考えてよいだろう。4、5は出典から判断して、二十巻本抄録の際に誤って採られたものだろう。7から10は『太平広記』談刻本の出典が『広異記』だが、ほかの版本、抄本と一致しないものである。これらについては、書かれた年代、内容などから『広異記』の逸文ではないことが、すでに排印本『広異記』や李劍国氏によって明らかにされている。

3 北京図書館普通古籍室

4 この二十巻本は、これまで杜徳橋氏がその存在を指摘した以外には、知られていなかった。筆者は今回、北京図書館における調査を通して、この二十巻本を発見することができた。また張宗祥が見たと思われる二十巻本は、おそらくこの二十巻本と同じ内容を持つものだったと考えられる。張宗祥が「鉄如意館隨筆」の中で、二十巻本に収録されている「女装」の話に言及していることは、すでに述べた通りである。しかし一方張宗祥が『説郛』巻四の最後に「宗祥案後二則二十巻本未見」と述べたうちの二則にあたるものは、『太平広記』巻三九「麻陽村人」、巻三〇五「王法智」であり、二則とも二十巻本に入っているという違いもある。

三 『広異記』各抄本の特徴——『太平広記』との比較を手がかりにして——

三種五本の『広異記』抄本の主として、形態、あるいは出典を中心に考察してきたが、以下ではさらに具体的な例を挙げ、一步進めて各本の特徴について比較、考察を試みたい。

すでに見てきたように、この五本は全て『太平広記』から編集されたものと考えられる。その意味では、この五本から原本『広異記』を復元するということは難しい。遡り得るとすれば、『太平広記』に残された『広異記』の逸文の復元ということになる。このように、『太平広記』と『広異記』を比較することは、非常に重要なことと思われる。

しかし『太平広記』のテキスト自体も、すでに宋代の原本は存在しない。北宋初期に成立したこの類書は、それ以前の文言小説を五百巻に収めている。逆に『太平広記』の成立以後、ここに収められた六朝、唐代の文言小説の原書は、失われてしまったともいえる。にもかかわらず、『太平広記』は、その内容が稗史小説という、当時の価値観では正式な文学として認められるものではなかったために、印刷されることなく、その版木は宮廷の秘書に蔵されることになった。しかし正式な形ではなくとも、『太平広記』は民間に流出していたらしく、有名なところでは、宋代の説話人達は、修業のために『太平広記』を読んでいたという記録も残されている。その後明代に談愷によって、刻本が刊行された。これが現在最も信頼のおける『太平広記』の排印本とされる中華書局本の底本いわゆる「談刻本」である。しかし談愷が初刻の際に集めることのできたのは『太平広記』五百巻すべてではなかった。例えば、卷二六一から二六五、二六九、二七〇は、とくに本文に混乱が見られ、各版本間でも違いが多いことで知られている。このため談愷は、後になって手に入れることのできた資料をもとに改訂を加えて、再度刊行をしている。中華書局版『太平広記』では、この談刻本三種が底本にされている。しかしこの談刻本だけでは、不十分な点が多いとして、中華書局本では、数多く散在する『太平広記』の刻本、抄本の中で、清代の学者陳鱣がみつけた宋本を明代の刻本に書き込ん

だもの（陳氏校本）、明代の野竹齋抄本、許自昌刻本、清代の黃氏巾箱本などを随時用いて、校勘している。實際これら幾種類かの抄本、刻本によって、談刻本の誤りを正せることも少なくない。このような『太平広記』の状況を踏まえるならば、三種五本の『広異記』が『太平広記』いずれの版本、抄本によっているかを考察することで、この五本のテキストの有効性、性格をさらに明らかにすることができるだろう。

しかし現在までのところ『太平広記』の版本研究は、進んでいるとはいえないうえに、中華書局版の『太平広記』も、談刻本以外の資料を十分に採用していない。全体的に『太平広記』と『広異記』の関係を考察していくことは、現時点では不可能である。そこで一例として、ここでは特に陳氏校本との関係を中心に、五本の『広異記』の性質について、考察してみたい。

具体的な方法としては、張国風「『太平広記』陳鱣校宋本異文輯選²¹⁾」という論文を使って、具体的な字句の問題を手がかりに『太平広記』『広異記』各本の関係について考えてみたい。この論文は、中華書局本『太平広記』では、いまだ談刻本以外の版本、抄本が十分に生かされていないという立場に立ち、陳氏校本と談刻本の異文について、対照した結果を並べている。張論文で指摘されている一例では、『広異記』「潁陽里正」（卷三〇四）において、中華書局本で「曾乘醉還村至少婦祠醉因繫馬臥祠門下。」となっている文章が、陳氏校本では「曾乘醉還村至少婦祠醉甚繫馬臥祠門下。」となっている。「因」の字と「甚」の字が違うことで、中華書局本よりも陳氏校本の方が、意味の通った文章になる。張論文ではこのように、陳氏校本の字句の中から、中華書局本では採用されていないが、本来談刻本よりもよいと判断される字句を多数指摘している。それによってこれまで意味がとれなかった原因が、テキストにあったことが明らかになった例も少なくない。他には排印本『広異記』において、文脈から推測で改められている字句が、陳氏校本に基づいて校訂できる例もある²²⁾。今回はこの論文を参考に、また筆者が北京図書館において見た陳氏校本、野竹齋抄本、許自昌刻本の結果も随所にふれながら、五本の『広異記』がそれぞれとづいている『太平広

記」を考えてみる。

(1) 百麓洞抄本、六巻本

張論文で挙げられている『広異記』の例は、四十四話七十三例にのぼる。その中で百麓洞抄本、六巻本に該当するのは、それぞれ十三話十七例、二十話三十例²³である。その中で、異文を調べた場合、百麓洞抄本は、陳氏校本と一致するもの三例、中華書局本と一致するもの七例、どちらとも一致しないもの七例である。また六巻本については、陳氏校本と一致するもの二十三例、中華書局本と一致するもの四例、どちらとも一致しないもの三例である。百麓洞抄本の中の話は、一話を除き六巻本と一致するわけであるが、上の例が六巻本と一致するのは、十一例。一致しないものも六例ある。具体的には以下のような例がある。

「寶珠」(巻四〇〇)

六巻本「天大熱，至寺門易衣，以紙裏珠，放金剛脚下，因忘収之。」

百麓洞抄本「天大熱，至寺門易衣，以底裏珠，放金剛脚下，因忘収之。」

違いは「以紙裏珠」の一句にあるが、六巻本は陳氏校本と文字が等しく、百麓洞抄本は談刻本と文字が等しい。六巻本 a、b、c の間では、このような文字の違いが全くなく、この二本は同一の底本から抄録されたものと考えられる。しかし百麓洞抄本については、収録された話がほぼ全て一致するにも関わらず、文字上では上記のように一致しない例が六例もある。

また、「張果女」「杜萬」の各話は、六巻本と百麓洞抄本の間で、字句の異同がかなり大きい、六巻本は「王琦」「僕僕先生」の両篇において、抄録の際に生じたと思われる遺漏があるが、百麓洞抄本には見られないなどの違いもある。これらから判断すると百麓洞抄本は、六巻本からの選集本ではあるが、百麓洞抄本が底本にした六巻本は、現在残っている六巻本とは違う系統の本のようである。さらに、百麓洞抄本は現在までのところ、現存する『広異記』

各抄本の中で、最も古いものでもあることから、百麓洞抄本を単に六巻本から選集したものと考えerのではなく、現存の六巻本とは、別の性格を持つ資料の一つとして、扱うべきだろう。このようにこれまで、六巻本については、ごくわずかなことしかわかっていなかったが、百麓洞抄本の存在が確認されたことで、それに先立つ原六巻本ともいべき本の存在が想定されるときに、現存の六巻本の成立時期についても、より正確な年代が確定できる可能性が高まってきた。また先に六巻本は、収録する話の選択に関して、編者の意図は見られないことを指摘したが、百麓洞抄本は、六巻本巻四、五から多くの話を選んでゐる。(特に巻四については、十二話中十話を採っている。)巻四には「華岳神女」「王儻」といった神女との恋愛を描いた話など、『広異記』全体から見て名篇といえる話が多い。このように百麓洞抄本には、六巻本から興味深い話を選ぶとする意図が見えるように思われる。

また『太平広記』との関係からいえば、六巻本は比較的陳氏校本と内容が近いことから、逆に現在陳氏校本が欠けているところを補う資料として使うこともできるだろう。⁽²⁵⁾さらに陳氏校本と同じように清代の孫潜が、宋本の『太平広記』を見つけ、談刻本に記した所謂孫氏校本(台湾大学図書館所蔵)と比較することも六巻本の性格をさらに明らかにするために必要なことだろう。⁽²⁶⁾

今回は、六巻本そのものの性格を考えると、いう目的のためにふれなかったが、六巻本aは、周星詒によって校勘されている。こうした結果を取り入れることも『広異記』のより信頼できるテキストを作るためには、重要なことだろう。六巻本の有効性について、最後に一つ簡単な例をあげておく。それは48「呂諲」(巻二七七)の中の字句についてである。「呂諲」の簡単な内容は以下のようなものである。呂諲はある日夢の中で冥府に連れていかれた。しかし呂は、年老いた母親がいることを訴えたために、冥府の役所では身代わりを探し、呂を放免する。後日確かめてみると身代わりの人は、健在で有ったが、一ヶ月後に死んでしまう。呂の夢が符合したわけである。この話の中で、呂は夢から覚めた後に、妻の兄顧況にこのことを語ったと書かれている。(「時与妻兄顧況同宿，既覺，為況說之。」)呂諲

は、『旧唐書』卷一八五、『新唐書』卷一四〇に伝がある。それによれば、若い頃貧しかった呂は、同郷の程楚賓の援助を得て学に励み、程の娘を妻にしたという。『広異記』の記述と一致しない。しかも顧況は戴孚のために「戴氏広異記序」を書いている。二人の関係を考えみれば、戴孚が顧況の親戚関係を誤って書くとは思われない。このためこの話がそもそも『広異記』の逸文ではないとの推測や傅璇琮氏に至っては『太平広記』に収められた『広異記』は戴孚が書いたものではない、つまり『広異記』が二種類あったなどの意見を出している²⁷⁾。しかし六巻本を見ると「兄」の字は「族」となっており、これを参考にすれば、歴史的事実と矛盾することなく、この話を『広異記』の逸文と判断することができる。

(2) 二十巻本

二十巻本についても、百麓洞抄本、六巻本と同じように張国風氏の調査を手がかりに、異文を調べた場合、全七十二例中、陳氏校本と一致するもの五十二例、中華書局本と一致するもの六例、中華書局本と一致するが、他本の例も挙げているもの十二例、どちらとも一致しないもの三例になる。二十巻本が参考にした『太平広記』も、陳氏校本と一致する内容を持つ部分が多いと言えそうである。

他本の例も挙げているものとは、例えば「華嶽神女」(卷三〇二)の中のある字句は、二十巻本には「飲之(一作酒)到醉」と書かれているものである。「之」の字は中華書局本と等しく、「酒」の字は陳氏校本と等しい。このことから二十巻本が参考にした『太平広記』は、一種類ではないということが言える。

また出典について、上記に挙げた他に、幾篇か問題のある話がある。それについて整理してみたい。

① 「丁約」(卷四五) 出典は『広異記』であるが、元和十八年の話で、戴孚が書くことは無理である。また高彦休『闕史』卷上「丁約劍解」に載る。

② 「程道惠」(卷三八二) 出典は『広異記』であるが、晋太元十八年(三九〇)の話。『法苑珠林』卷五五は王琰

『冥祥記』を引いてこの話を載せている。

③ 「胡勒」(卷三八三) 出典は『広異記』であるが、晋隆安三年(三九九)の話。

④ 「牧牛兒」(卷四二六) 出典は『広異記』であるが、晋時の話。また『稗海』本李冗『独異志』卷上に載る。

『広異記』に載せてあるのは、基本的に唐代の話であるで、これらの話は逸文とは認められない。²⁸⁾

また二十巻本は、複数の『太平広記』を参考とし、『太平広記』以外の類書からも佚文を集めているが、逆にこの二十巻本が載せていない話を調べてみることで、二十巻本が参考にした『太平広記』について、さらに明らかになることがあると思われる。該当するものを以下に記す。

① 「鄭相如」(卷八二) 談刻本出缺。野竹齋抄本出『広異記』。

② 「成珪」(卷一一一) 談刻本出『卓異記』。野竹齋抄本出『広異記』。六卷本卷二。

③ 「周濟川」(卷三四二) 談刻本出『祥異記』。野竹齋抄本出『広異記』。

④ 「鄭潔」(卷三八〇) 談刻本出『博異記』。野竹齋抄本出『広異記』。

⑤ 「石井崖」(卷四三二) 出『広異記』。

⑥ 「張鑄」(卷四五七) 談刻本出缺。野竹齋抄本出『広異記』。

「石井崖」を除いては、野竹齋抄本が『広異記』を出典とし、談刻本と出典が異なるものである。つまり二十巻本には、野竹齋抄本系統の内容は取り入れられていないと推測することができる。しかし二十巻本は、陳氏校本系統をはじめとして、『太平広記』諸本を参考にしており、話の数も非常に多い。成立の時間的には、清代後期、六卷抄本より下ることは確かであるが、詳しく見ていけば、より信頼できる『広異記』のテキストを作るために参考となる内容が多く含まれているだろう。

四 おわりに

以上本論文では、北京図書館所蔵の『広異記』抄本五本の内容を紹介するとともに、その五本の『広異記』と『太平広記』の関係を考察してきた。最後に唐代文言小説の資料全般に関する問題についても、簡単にふれておきたい。『太平広記』は、北宋初期以前の文言小説をほぼ網羅して収めており、周知の通り、『広異記』との関係のみならず、文言小説研究には欠かせない資料である。しかしすでに述べたように、『太平広記』の完全な原本は、印刷、出版されたことはなく、現在完璧な『太平広記』を復元することはほぼ不可能である。そのためもあってか、文言小説の資料整理は、明清小説のそれと比べて明らかに遅れをとってきた。今後重要なことの一つは、『太平広記』の各版本、抄本について、さらに比較検討を進めていくことである。例えば、談刻本については、これまで中華書局本では、三種の談刻本を底本としていることを明言しているが、張国風氏によれば、北京図書館には、さらにこの三種の談刻本とは、違う種類の談刻本が所蔵されているという²⁹。また筆者が、『広異記』の逸文を中心に、北京図書館において、陳氏校本、野竹齋抄本をみただけでも、中華書局本には明らかな印刷上のミスや他本との違いを取り入れていないところなどがあつた。例えば「劉巨麟」は格好の例である。この話は、中華書局本では、「出撫異記」と記されており、あたかも陳氏校本や野竹齋抄本との間に違いがないようであるが、実際には両者とも「出広異記」となっており、中華書局本の間違いであることがわかる。しかも『撫異記』は、「太平広記引用書目」にはその名が見えるものの、『太平広記』に載っている話はこの「劉巨麟」のみであり、他書にもこの書名は見あたらない。排印本『広異記』は、この話を『広異記』の逸文と認め、李劍国氏は認めていない。しかしこれらのことから判断すれば、「劉巨麟」の出典を『撫異記』としたのは談刻本の誤りであり、この篇を『広異記』の逸文である判断して問題はないだろう。

この他にも管見の限りではあるが、『太平広記』巻三六七「崔廣宗」、同巻三七四「湘穴」はそれぞれ野竹齋抄本で

は、出典として『広異記』が挙げられている。しかし中華書局本では出典としてそれぞれ「広古今五行記」「搜神記」のみを挙げている。この二条が『広異記』の逸文であるか否かの判断は今省くとして、陳氏校本や野竹齋抄本の出典が談刻本と異なる場合は、原則として中華書局本は、異同を言及しているので、この二条については中華書局本に、遺漏があることになる。特に「崔廣宗」については、李劍国氏は、明の李詡が『戒庵老人漫筆』巻六に『広異記』からこの話を引いたことを指摘しているが、『太平広記』が「広古今五行記」のみを出典にしていることを根拠に、記述を李詡の間違いと判断している³¹。しかし実際は李詡が野竹齋抄本『太平広記』を参考とした可能性も考えられる。野竹齋抄本には遺漏や混入などが多いためこれまでその価値があまり認められてこなかった。しかし資料的には、出典、文字から見て、陳氏校本に近いと考えられ、談刻本との異文の比較などその整理が待たれている。

また以上に見てきたように、唐代の文言小説のテキストについて考える場合、『太平広記』が最も基本的かつ重要な資料となることは明らかである。しかし『広異記』各抄本のように明清期のもので、『太平広記』から編集したものであっても、その拠った『太平広記』を詳しく検討することで、新たに資料的価値を持つ可能性が十分にある。唐代の文言小説については、原本を見つけることが、ほぼ不可能に近いことを考えると、今回の百麓洞抄本や六巻本のような明清期の本を見つけること³²や『太平広記』自身の研究を進めることが重要と思われる。

以上『広異記』三種五本の抄本についての調査結果と『太平広記』との関係、唐代言言小説の資料の問題について考察してみた。

今後は、今回新たに『広異記』の逸文である可能性がでてきた話について判断するなど各抄本を整理校勘し、より信頼できる『広異記』のテキスト作ることを目指したい。

注

(一) 唐臨・戴孚著・方詩銘輯校『冥報記・広異記』(古小説叢刊・中華書局・一九九二)

- (2) 南開大学出版社・一九九三
- (3) 「載」の字は「戴」の字の誤りと思われる。この書目は、靖康の難に遭い散佚してしまった北宋の秘書の蔵書を南宋になり再び集めた際に、編まれた書目である。
- (4) 『稗統続編』は、同じく『趙定字書目』の中に名が見られる『稗統』の続編と思われる。『稗統』も現在では、目録しか残されていないが、それから判断するところでは、『類説』『説郭』と同じような筆記小説の叢書であったと思われる。(趙用賢『趙定字書目』・古典文学出版社・一九五七・「出版説明」参照)
- (5) 六卷本巻一収録「劉門奴」(『太平広記』巻三二八)に関する記述がある。杜甫の「諸將五首」其一中の一句「昔日玉魚蒙葬地」の典故が、この「劉門奴」の話であること、しかし杜詩の注釈の多くが、「劉門奴」を誤って「劉明奴」としていることを指摘している。『広異記』「劉門奴」の話の内容とは、直接関係はない。
- (6) 引用文中「余」とは、傅增湘(藏園・一八七二—一九四九)を指す。莫友芝が太平天国の乱以後散逸した文宗、文匯、文瀾の三閣の蔵書を捜し作った書目をもとに作ったものが『亭知見傳本書目』であり、その後傅增湘が訂補し、『藏園訂補 亭知見傳本書目』となった。
- (7) 『蕘圃藏書題識叙録』には、『読書敏求記』の記述を踏まえたと思われる「劉門奴」への言及はあるが、この本の形態などに関しての記述はない。(この部分に関しての叙録は、欠文の部分が多い。) また書目8には、「黄蕘翁跋」とあるようにこの清抄本も、黄丕烈のものであった。黄丕烈の蔵書は、民国期に涵芬樓に収められた後、日中戦争でその大半が焼失してしまった。原本がなくなっている現在、書目7の本が本当に明刻本であったのか、書目8の本と関係があるのかなどはわからない。
- (8) 『新華学報』一五・一九八六 杜德橋は、英国オックスフォード大学教授 Glen Dudbridge である。Dudbridge には、『広異記』に「ついで論じた『Religious Experience and Lay Society in T'ang China A reading of Tai Fu's Kuang-i-chi』(Cambridge university press 一九九五)の著書がある。
- (9) 杜德橋「広異記初探」(張氏所指的「二十卷本」為何書、未詳。(中略)不知那缺少此二則的二十卷本和太平広記等的關係如何?是否和晚清藏書家汪士鐘所藏的二十卷本相似?這些問題,可能要等国内諸圖書館的善本藏書整理和開放工作完成之後,方可解答。)(四二頁)

方詩銘 排印本「広異記」『輯校説明』「所謂「後二則」、即見於「広記」的「麻陽村人」条和「王法智」条、又即「類說」節引的「王弼守門」和「神降詩」二条、不知為何什麼不見於二十卷的「広異記」、而且這個二十卷本、從來不見著錄、也不知張宗祥先生從何處見到、這裏只能存疑了。」(六頁)

李劍国「唐五代志怪伝奇叙録」「広異記二十卷」「二十卷本絶不見著錄、疑所指即六卷抄本、若張氏所言不誤、確有二十卷本、蓋亦輯本耳。」(四六五頁)

(10) 書目10、書目11の六卷抄本と内容は同じ。詳しくは以下の各本の説明を参照のこと。便宜上書目10、書目11を六卷本 a、六卷本 b と命名し、今回新しく発見したものを六卷本 c と名づける。

(11) 「付録」『広異記』抄本三種目録を参照のこと。

(12) 表の「篇名・巻数」の巻数は、『太平広記』の巻数である。以下ことわりのない限り篇名の後ろの数字は、『太平広記』の巻数を指すものとする。出典がない場合には「出缺」とする。(例：「張果女」談刻本)

また「談刻本」「野竹齋抄本」「陳氏校本」は、それぞれ『太平広記』の異なる版本、抄本のことである。現在『太平広記』のテキストとして、信頼できるものに、明嘉靖、隆慶年間の談愷刻本(略称談刻本)、明陳与文野竹齋抄本(略称野竹齋抄本または明抄本)、明末許自昌刻本(略称許刻本)、清黄晟刻本(略称黄氏巾箱本)、四庫本、また清人陳鱣が、宋本の残本を見つけ、許刻本に書き込みをいれた所謂陳氏校本(あるいは残宋本)がある。現在一般に広く使われているテキスト中華書局版『太平広記』(一九六二)は、談刻本を底本としている。しかし談刻本とその他の刻本、抄本とは、出典、内容の点多々違いがあり、中華書局本は随時他の版本、抄本の成果を取り入れている。そこで以下各抄本について談刻本、野竹齋抄本、陳氏校本の間で出典の違うものを表に整理し、「三」「広異記」各抄本の特徴「太平広記」との比較を手がかりにして「一」において『太平広記』各版本、抄本と『広異記』の関係について改めて取り上げることにする。また「牛氏童子」については、六卷本 b の項を参照のこと。

(13) 百麓洞抄本にあって、六卷本にないのは 12「雷鬪」(『太平広記』卷三九三)である。しかしもともと、「雷鬪」は、同じ内容のものが、『太平広記』卷四六四に「鯨魚」として、収録されている。六卷本には 84「鯨魚鬪蛇」として載っているが、前後には卷四六四の話が続いていることや、細かい字句の違いから判断すると、百麓洞抄本は卷三九三から、六卷本は卷四六四から採ったものと考えられる。しかし大筋において内容に相違はない。

(14) 文献による調査のほかに、「百麓洞」については、張国風氏をはじめ、北京図書館、北京大学各古籍室の方々に助言をいただいたが、現在までのところ手がかりはつかめていない。また今回、山東大学教授袁世碩先生を通じて北京図書館の李致中氏の助言といただくことができた。さらに袁世碩先生からは、一つの推測として、『雜抄五種五卷』の五種の本が、全て道家的な内容を持つ志怪小説であることから、百麓洞は、江西、湖南一帯の道観の名前ではないかとの意見もいただいた。このことについては、無論さらに検討を要するが、今後百麓洞について、さらに調べていくにあたって、この『広異記』以外の四種の本は、数少ない手がかりの一つである。今回は、その内容などについて、ふれることができなかったが、今後袁先生の助言を参考に調査を進めていきたい。

(15) 杜徳橋は、前掲論文で、「長楽」が馮舒（二五九三—一六三三）の蔵書印であることを指摘しているが、それはこの六巻本aが陸基清の手抄本であるとの蔣鳳藻の記述と矛盾することになる。一方葉昌熾著 王欣夫補正、徐鵬輯『蔵書紀事詩・附補正』（上海古籍出版社・一九八九）よれば、「長楽」は「上黨」長方印、「馮氏蔵書」方印などとともに馮家の蔵書印であるという。

(16) 「付録」『広異記』抄本三種目録」を参照のこと。

(17) 『紀聞』牛肅撰。『新唐書・芸文志』小説家類に、「牛肅紀聞十卷」の記述がある。しかし原本は失われ、現在では『太平広記』に逸文百二十篇あまりが残される。そのうち五篇に、「牛氏童子」と同じように、牛肅の祖先、家族についてふれた記述がある。これらの記述から、牛肅は武后期に生まれたと推測され、『紀聞』の成立は、盛唐の終わり頃、『広異記』よりもやや早いと考えられる。また『太平広記』各本では、「牛氏童子」の篇名は「牛氏僮」となっている。

(18) しかし六巻本4「李嵩」5「狄仁傑」については、本来『太平広記』では「狄仁傑」「李嵩」の順序で収録されている。また、83「南海大蟹」84「鯨魚鬪蛇」85「鯉魚鬪蛇」については、本来84、85、83の順序である。

(19) 本来「元」の字は「玄」、諱を避けたものである。①のものよりも長く、詳しく書かれている。字句を比べてみると、二十「崔玄微」（出西陽雜俎及博異記）にもあるが、②の「元装」についても同じ。またこの話は、『太平広記』巻四一六「崔玄微」（出西陽雜俎及博異記）あるいは「白孔六帖」のものであったと思われる。

(20) また二十巻本の存在を指摘していた張宗祥は「鉄如意館隨筆」の中でこの「玄装」を引き、『西遊記』にこの話が引かれていることを指摘している。（『鉄如意館隨筆』『中華文史論叢』一九八四第一輯所収）

- (21) 『北京図書館刊』(一九九五年一月・第三、四期 総第一三、一四期)
- (22) 「李霸」(卷三三) 中華書局排印本『広異記』「逐人通両疋細馬」(方詩銘注「細」疑為「絹」字之誤, 「馬」疑涉下「馬」字衍) 一方陳氏校本では「逐人通両疋絹」となっている。
- (23) 六卷本は、「南陽士人」(卷四三二出原化記)を含む。
- (24) 排印本『広異記』では、この部分について以下のように注記している。「底」, 據上文「至寺門易衣」, 此「底」字疑為「衣」字之誤。」しかし陳氏校本を参考にすれば意味が通る。
- (25) 陳氏校本については、注14の論文の他、同じく張国風氏による『太平広記』陳校本価値」(中国人民大学学报一九九四年五期)に詳しい。
- (26) この点については、杜德橋氏が注3の論文において、出典から、六卷本と孫氏校本が一致する点の多いことを根拠に、六卷本が参考にした『太平広記』は、孫氏校本と似た内容を持つ本であったのではないかと推測している。また現在北京図書館と台湾大学の間では、すでに陳氏校本と孫氏校本を交換しているが、比較研究などについては、いまだ将来にその成果を待っている段階である。張国風氏によれば、孫氏校本の校勘は、『太平広記』五百巻全てにわたっておりさらに内容的にも、陳氏校本より優れた部分が多いとのことである。
- (27) 傳璇琮「顧況考」(『唐代詩人叢考』所収・中華書局、一九八〇)しかしこの話の雰囲気は、『広異記』の他の話と似ており、またこれ以外に『広異記』が二種類あったことを裏付ける根拠はなく、性急な意見である。
- (28) この四話についても、排印本『広異記』、李劍国氏によって、『広異記』の逸文でないことが明らかにされている。
- (29) 張国風「試論『太平広記』の版本演変」(文献4・一九九四・総期62期)
- (30) 二十巻本以「楊国忠」。
- (31) 『唐五代志怪伝奇叙録』(四八八頁)
- (32) このことについては、「唐代筆記小説的校讎」(周勛初『唐人筆記小説考察』所収・江蘇古籍出版社・一九九六)の中でも触れられている。

「如果现在有人要想从事唐人笔记小说的整理工作, 访求宋元旧刻, 希望得到前人从未见到过的善本, 可能性是不大的, 但散在各处的钞本数量还是不少, 应该多方寻觅, 广搜善本, 以资比较。」(七五—七六頁)

「在唐人笔记的版本問題上不能仰求宋元旧本的发现，而是应该广泛访求明清人的旧钞进行比较研究，缜密考辨，然后吸收各本之长，自可整理出一些接近原貌的本子来。」（七九頁）

付録 『広異記』抄本三種目録

◇篇名後ろの括弧内、卷数、分類は『太平広記』による。

◇*の印がついているものは、出典について各本で相違のあるものである。

I 『広異記選』（百麓洞抄本）

- 1 劉門奴（卷三二八・鬼）／2 李嵩（卷三二九・鬼）／*3 張果女（卷三三〇・鬼）談刻本出缺・野竹齋抄本、陳氏校本出広異記・六卷本卷一／4 華妃（卷三三〇・鬼）／5 汝陰人（卷三〇一・神）／6 劉清真（卷二四・神仙）／7 武勝之（卷三三一・器玩）／8 破山劍（卷三三二・器玩）／9 杜萬（卷三五六・夜叉）／10 鄭齊嬰（卷三五八・神魂）／11 柳少遊（卷三五八・神魂）／12 雷闢（卷三九三・雷）／13 李測（卷四四〇・畜獸・鼠）／14 天宝廣騎（卷四四〇・畜獸・鼠）／15 畢杭（卷四四〇・畜獸・鼠）／16 吳興漁者（卷四七二・水族・龜）／17 青泥珠（卷四〇二・宝）／18 徑寸珠（卷四〇二・宝）／19 宝珠（卷四〇二・宝）／20 紫鞞鞞（卷四〇三・宝・雜玉）／21 邊洞玄（卷六三・女仙）／22 張連翹（卷六四・女仙）／23 齊幹（卷四二〇・龍）／24 李叔齋（卷二七九・夢）／25 崔敏慤（卷三〇一・神）／26 仇嘉福（卷三〇一・神）／27 華岳神女（卷三〇二・神）／28 王儻（卷三〇二・神）／29 劉可大（卷三〇三・神）／30 穎陽里正（卷三〇四・神）／31 王法智（卷三〇五・神）／32 李佐時（卷三〇五・神）／33 僕僕先生（卷二一・神仙）／34 張李二公（卷二二・神仙）／35 張須彌（卷三九三・雷）／36 蔡布閔（卷三九三・雷）／37 歐陽忽雷（卷三九三・雷）／*38 牛氏童子（卷四〇〇・宝・金）談刻本出紀録・野竹齋抄本、陳氏校本出紀聞・六卷本卷三／39 成弼（卷四〇〇・宝・金）／40 李播（卷二九八・神）／41 王萬徹（卷二九八・神）／42 趙州參軍妻（卷二九八・神）／43 河東縣尉（卷三〇〇・神）／44 李湜（卷三〇〇・神）／45 張嘉祐（卷三〇〇・神）／46 南海大漁（卷四六四・水族）／47 南海大蟹（卷四六四・水族）／48 鯉魚鬪蛇（卷四六四・水族）／49 謝二（卷四七〇・水族・水族為人）／50 荊州漁人（卷四七〇・水族・水族為人）／51 王太（卷四三一・虎）／52 石井崖（卷四三一・虎）
- ◇1—5 六卷本卷一、6—11 六卷本卷二、13—24 六卷本卷三、25—34 六卷本卷四、35—47 六卷本卷五、48—52 六卷本卷六

II 『広異記』六卷本目録

- 卷一：1 張琮（卷三二八・鬼）／2 劉門奴（卷三二八・鬼）／3 閻庚（卷三二八・鬼）／4 李嵩（卷三二九・鬼）／*5 狄仁傑（卷

- 三二九·鬼 談刻本出缺·陳氏校本出店異記·二十卷本卷七／6張守珪(卷三二九·鬼)／7楊瑒(卷三二九·鬼)／*8張果女(卷三三〇·鬼) 談刻本出缺·野竹齋抄本、陳氏校本、出店異記·百麓洞抄本3·二十卷本卷七／9華妃(卷三三〇·鬼)／10郭知運(卷三三〇·鬼)／11王光本(卷三三〇·鬼)／12楊元英(卷三三〇·鬼)／13汝陰人(卷三〇一·神)
- 卷二：14劉清真(卷二四·神仙)／15武勝之(卷三三一·器玩)／16破山劍(卷三三一·器玩)／17杜萬(卷三五六·夜叉)／18鄭齊嬰(卷三五八·神魂)／19柳少遊(卷三五八·神魂)／20蘇萊(卷三五八·神魂)／21杜暹(卷一四八·定數)／22僧道憲(卷一一·報應)／*23成珪(卷一一·報應) 談刻本出店異記·野竹齋抄本出店異記／24王琦(卷一一·報應)／25張御史(卷一一·報應)／26李昕(卷一一·報應)／27李洽(卷一一·報應)／28王乙(卷一一·報應)
- 卷三：29陳正觀(卷四三九·畜獸羊)／30崔日用(卷四三九·畜獸·豕)／31李測(卷四四〇·畜獸·鼠)／32天寶驢(卷四四〇·畜獸·鼠)／33畢杭(卷四四〇·畜獸·鼠)／34崔懷疑(卷四四〇·畜獸·鼠)／35劉回彥(卷四七二·水族·龜)／36吳興漁者(卷四七二·水族·龜)／37青泥珠(卷四〇二·寶)／38徑寸珠(卷四〇二·寶)／39寶珠(卷四〇二·寶)／40紫鞮(卷四〇三·寶·雜寶)／41邊洞玄(卷六三·女仙)／42張連翹(卷六四·女仙)／43詞黎勒(卷四一四·草木·香葉)／44臨淮將(卷四一五·草木·木怪)／45齊澣(卷四二〇·龍)／46顧琮(卷二七七·夢)／47玄宗皇帝(卷二七七·夢)／48呂譚(卷二七七·夢)／49楚寔(卷二七八·夢)／50薛義(卷二七八·夢)／51李叔齊(卷二七九·夢)
- 卷四：52崔敏毅(卷三〇一·神)／53仇嘉福(卷三〇一·神)／54華岳神女(卷三〇二·神)／55王儻(卷三〇二·神)／56季広琛(卷三〇三·神)／57劉可大(卷三〇三·神)／58王籍(卷三〇四·神)／59穎陽里正(卷三〇四·神)／60王法智(卷三〇五·神)／61李佐時(卷三〇五·神)／62僕僕先生(卷三二·神仙)／63張李二公(卷三三·神仙)
- 卷五：64鉗耳含光(卷一一五·報應)／65席豫(卷一一五·報應)／66張須彌(卷三九三·雷)／67蔡布閱(卷三九三·雷)／68徐景先(卷三九三·雷)／69歐陽忽雷(卷三九三·雷)／*70牛氏童子(卷四〇〇·寶·金) 談刻本出紀錄·野竹齋抄本、陳氏校本出紀聞·百麓洞抄本38／71成弼(卷四〇〇·寶·金)／72李播(卷二九八·神)／73狄仁傑(卷二九八·神)／74王萬徹(卷二九八·神)／75趙州參軍妻(卷二九八·神)／76河東縣尉(卷三〇〇·神)／77李湜(卷三〇〇·神)／78葉淨能(卷三〇〇·神)／79張嘉祐(卷三〇〇·神)／80盧融(卷四六三·禽鳥)／81王緒(卷四六三·禽鳥)／82南海大漁(卷四六四·水族)／83南海大蟹(卷四六四·水族)
- 卷六：84鯨魚鬪蛇(卷四六四·水族)／85鯉魚鬪蛇(卷四六四·水族)／86謝二(卷四七〇·水族·水族為人)／87荊州漁人(卷

四七〇・水族・水族為人／88王太（卷四三二・虎）／89荊州人（卷四三二・虎）／90劉老（卷四三一・虎）／91虎婦（卷四三一・虎）／92松陽人（卷四三二・虎）／*93南陽士人（卷四三二・虎）諸太平広記出原化記／94虎恤人（卷四三二・虎）／95范端（卷四三二・虎）／96石井崖（卷四三二・虎）／97涼州人牛（卷四三四・畜獸・牛）／98韋有柔（卷四三六・畜獸・馬）／99姚氏（卷四三七・畜獸・犬）／*100劉巨麟（卷四三七・畜獸・犬）談刻本出披異記・陳氏校本、野竹齋抄本出広異記・二十卷本卷十六／101崔惠童（卷四三八・畜獸・犬）／102楊氏（卷四三九・畜獸・羊）

Ⅲ 『広異記』二十卷本目錄

卷一：1徐福（卷四・神仙）／2僕僕先生（卷二二・神仙）／3張李二公（卷三三・神仙）／4劉清真（卷二四・神仙）／5麻陽村人（卷三九・神仙）／6慈心仙人（卷三九・神仙）／7石巨（卷四〇・神仙）／8王老（卷四一・神仙）／9李僊人（卷四二・神仙）／*10丁約（卷四五・神仙）闕史卷上

卷二：11衡山隱者（卷四五・神仙）／12潘尊師（卷四九・神仙）／13秦時婦人（卷六一・女仙）／14何二娘（卷六一・女仙）／15邊洞元（卷六三・女仙）／16張連翹（卷六四・女仙）／17輔神通（卷七二・道術）／18婺州金剛（卷一〇〇・釈証）／19長安縣繫囚（卷一〇四・報応）／20盧氏（卷一〇四・報応）／21陳利賓（卷一〇四・報応）／22王宏（卷一〇四・報応）／23田氏（卷一〇四・報応）／24李惟燕（卷一〇五・報応）／25孫明（卷一〇五・報応）／26三刀師（卷一〇五・報応）

卷三：27宋參軍（卷一〇五・報応）／28劉鴻漸（卷一〇五・報応）／29張嘉猷（卷一〇五・報応）／30魏恂（卷一〇五・報応）／31杜思訥（卷一〇五・報応）／32龍興寺主（卷一〇五・報応）／33陳哲（卷一〇五・報応）／34僧道憲（卷一一一・報応）／35王琦（卷一一一・報応）／36張御史（卷一一二・報応）／37李昕（卷一一二・報応）／38李洽（卷一一五・報応）／39王乙（卷一一五・報応）

卷四：40鉗耳含光（卷一一五・報応）／41席豫（卷一一五・報応）／42蘇頰（卷一一一・報応）／43張縱（卷一三三・報応）／44杜暹（卷一四八・定數）／45皇甫氏（卷一六二・感応）／46句容佐史（卷二二〇・醫）／47武勝之（卷二二一・器玩）／48破山劍（卷二二二・器玩）／49顧琮（卷二七七・夢）／50元宗（卷二七七・夢）／51呂諶（卷二七七・夢）／52楚寔（卷二七八・夢）／53薛義（卷二七八・夢）／54召皎（卷二七九・夢）／55李捎雲（卷二七九・夢）／56李叔齋（卷二七九・夢）／57盧彥緒（卷二七九・夢）

*58周廷翰（卷二七九・夢）談刻本出広異記・野竹齋抄本出稽神錄／59豆廬榮（卷二八〇・夢）／60扶溝令（卷二八〇・夢）／61王方平（卷二八〇・夢）／62閻涉（卷二八〇・夢）

- 卷五：63李進士（卷二八一・夢）／64李播（卷二九八・神）／65狄仁傑（卷二九八・神）／66王萬徹（卷二九八・神）／67趙州參軍妻（卷二九八・神）／68河東縣尉妻（卷三〇〇・神）／69三衛（卷三〇〇・神）／70李湜（卷三〇〇・神）／71葉淨能（卷三〇〇・神）／72張嘉祐（卷三〇〇・神）／73汝陰人（卷三〇一・神）／74崔敏毅（卷三〇一・神）
 卷六：75仇嘉福（卷三〇一・神）／76章秀莊（卷三〇二・神）／77華岳神女（卷三〇二・神）／78王儻（卷三〇二・神）／79季広琮（卷三〇三・神）／80劉可大（卷三〇三・神）／81王籍（卷三〇四・神）／82潁陽里正（卷三〇四・神）／83王法智（卷三〇五・神）／84李佐時（卷三〇五・神）／85張琮（卷三二八・鬼）／86劉門奴（卷三二八・鬼）／87闍庚（卷三二八・鬼）
 卷七：*88狄仁傑（卷三二九・鬼）談刻本、野竹齋抄本出缺・陳氏校本出広異記・六卷本卷一／89李嵩（卷三二九・鬼）／90張守珪（卷三二九・鬼）／91楊瑒（卷三二九・鬼）／*92張果女（卷三三〇・鬼）談刻本出缺・野竹齋抄本、陳氏校本出広異記・百麓洞抄本3・六卷本卷一）／93華妃（卷三三〇・鬼）／94郭知運（卷三三〇・鬼）／95王光本（卷三三〇・鬼）／96楊元英（卷三三〇・鬼）／97薛矜（卷三三一・鬼）／98朱七娘（卷三三一・鬼）／99李光遠（卷三三一・鬼）／100李翳（卷三三一・鬼）／101安宜坊書生（卷三三一・鬼）／102裴盛（卷三三一・鬼）
 卷八：103黎陽客（卷三三二・鬼）／104李迴秀（卷三三三・鬼）／105琅琊人（卷三三三・鬼）／106裴徽（卷三三三・鬼）／107李陶（卷三三三・鬼）／108長洲陸氏女（卷三三三・鬼）／*109高生（卷三三三・鬼）諸太平広記出宣室志／110楊準（卷三三四・鬼）／111王乙（卷三三四・鬼）／112韋栗（卷三三四・鬼）／113河間劉別駕（卷三三四・鬼）／114王元之（卷三三四・鬼）／115朱敖（卷三三四・鬼）／116裴虬（卷三三四・鬼）／117趙佐（卷三三四・鬼）／118岐州佐史（卷三三四・鬼）
 卷九：119凌儀王氏（卷三三五・鬼）／120章仇兼瓊（卷三三五・鬼）／*121楊國忠（卷三三五・鬼）談刻本出缺・野竹齋抄本、陳氏校本出広異記、說郛出蕭湘錄／122李叔齊（卷三三五・鬼）／123新繁縣令（卷三三五・鬼）／124姚蕭品（卷三三五・鬼）／125常夷（卷三三六・鬼）／126張守一（卷三三六・鬼）／127宇文觀（卷三三六・鬼）／128李瑩（卷三三六・鬼）
 卷十：129裴賊（卷三三六・鬼）／130李氏（卷三三六・鬼）／131韋璜（卷三三七・鬼）／132薛萬石（卷三三七・鬼）／133范倣（卷三三七・鬼）／134李幹（卷三三七・鬼）／135蕭審（卷三三七・鬼）／136商順（卷三三八・鬼）／137李載（卷三三八・鬼）／138高勵（卷三三八・鬼）／139朱自勤（卷三三八・鬼）／140羅元則（卷三三九・鬼）／141李元平（卷三三九・鬼）／142杜萬（卷三五六・夜叉）／143鄭齊嬰（卷三五八・神魂）／144柳少遊（卷三五八・神魂）
 卷十一：145蘇萊（卷三五八・神魂）／146洛陽婦人（卷三六一・妖怪）／147晁良貞（卷三六一・妖怪）／148李氏（卷三六一・妖怪）／

- 149張寅(卷三六二・妖怪)／150燕鳳祥(卷三六二・妖怪)／151韋訓(卷三六八・精怪)／152盧贊善(卷三六八・精怪)／153蘇丕女(卷三六九・精怪)／154蔣維岳(卷三六九・精怪)／155韋諒(卷三六九・精怪)／156桓彦範(卷三七一・精怪)／157蔡四(卷三七一・精怪)／158李華(卷三七二・精怪)／159商鄉人(卷三七二・精怪)／160東萊人女(卷三七五・再生)／161鄭會(卷三七六・再生)／162王穆(卷三七六・再生)／163湯氏子(卷三七六・再生)／164李彊友(卷三七七・再生)
 卷十二：165韋広濟(卷三七七・再生)／166隰州佐史(卷三七八・再生)／167開元選人(卷三七九・再生)／168崔明達(卷三七九・再生)／169費子玉(卷三七九・再生)／170梅先(卷三七九・再生)／171魏靖(卷三八〇・再生)／172楊再思(卷三八〇・再生)／173金壇王丞(卷三八〇・再生)／174韋延之(卷三八〇・再生)／175霍有鄰(卷三八一・再生)／176皇甫恂(卷三八一・再生)
 卷十三：177裴齡(卷三八一・再生)／178六合縣丞(卷三八一・再生)／179薛濤(卷三八一・再生)／180鄧成(卷三八一・再生)／181張瑤(卷三八一・再生)／*182程道惠(卷三八二・再生)法苑珠林出冥祥記／183河南府史(卷三八二・再生)／*184周頌(卷三八二・再生)談刻本出広異記・野竹齋抄本出異聞録／185盧弁(卷三八二・再生)／186胡勒(卷三八三・再生)／187李及(卷三八四・再生)
 卷十四：188阿六(卷三八四・再生)／189鄧澄(卷三八四・再生)／190王勳(卷三八四・再生)／191周哲滯妻(卷三八六・再生)／192劉長史女(卷三八六・再生)／193岐王範(卷三八七・悟前世)／194大華公主(卷三八七・悟前世)／195孫緬家奴(卷三八八・悟前世)／196唐堯臣(卷三八九・塚墓)／197奴官家(卷三九〇・塚墓)／*198李思恭(卷三九〇・塚墓)談刻本出広異記・野竹齋抄本出録異記／*199王果(卷三九一・銘記)諸太平広記出缺／200雷鬪(卷三九三・雷)／201張須彌(卷三九三・雷)／202蔡希閔(卷三九三・雷)／203徐景先(卷三九三・雷)／204歐陽忽雷(卷三九三・雷)／205成弼(卷四〇〇・宝・金)／206青泥珠(卷四〇一・宝)／207徑寸珠(卷四〇一・宝)／208宝珠(卷四〇一・宝)
 卷十五：209紫鞮鞞(卷四〇三・宝・雜宝)／210訶黎勒(卷四一四・草木・香藥)／211臨淮將(卷四一五・草木・木怪)／212齊澣(卷四二〇・龍)／213蘇頰(卷四二五・龍・蛟)／214鬪蛟(卷四二五・龍・蛟)／*215牧牛兒(卷四二六・虎)神海出独異志／216巴人(卷四二六・虎)／217費忠(卷四二七・虎)／218虎婦(卷四二七・虎)／219稽胡(卷四二七・虎)／220碧石(卷四二七・虎)／221斑子(卷四二八・虎)／222劉薦(卷四二八・虎)／223勳自勵(卷四二八・虎)／224宣州兒(卷四二八・虎)／225笛師(卷四二八・虎)／226張魚舟(卷四二九・虎)／227王太(卷四三一・虎)／228荊州人(卷四三一・虎)
 卷十六：229劉老(卷四三一・虎)／230虎婦(卷四三一・虎)／231松陽人(卷四三二・虎)／232虎恤人(卷四三二・虎)／233范端(卷

- 四三二·虎／234涼州人牛（卷四三四·畜獸·牛）／*235洛水牛（卷三四三·畜獸·牛）談刻本出広異記·野竹齋抄本出聞奇録·陳氏校本出需説録／236韋有柔（卷四三六·畜獸·馬）／237姚甲（卷四三七·畜獸·犬）／*238劉巨麟（卷四三七·畜獸·犬）談刻本出撰異記·陳氏校本、野竹齋抄本出広異記·六卷本卷六／239崔惠童（卷四三八·畜獸·犬）／240楊氏（卷四三九·畜獸·羊）／241陳正觀（卷四三九·畜獸·羊）／242崔日用（卷四三九·畜獸·豕）／243李測（卷四四〇·畜獸·鼠）／244天寶彊騎（卷四四〇·畜獸·鼠）／245畢杭（卷四四〇·畜獸·鼠）／246崔懷疑（卷四四〇·畜獸·鼠）／247閩州莫徠（卷四四一·畜獸·象）
 卷十七：248安南獵者（卷四四一·畜獸·象）／249冀州刺史子（卷四四二·畜獸·狼）／250正平縣村人（卷四四二·畜獸·狼）／251鄭氏子（卷四四二·畜獸·狸）／252魏元忠（卷四四四·畜獸·猿）／253韋虛己子（卷四四四·畜獸·猿）／254張鋌（卷四四五·畜獸·猿）／255長孫無忌（卷四四七·狐）／256僧服禮（卷四四七·狐）／257上官翼（卷四四七·狐）／258大安和尚（卷四四七·狐）／259楊成伯（卷四四七·狐）
 卷十八：260劉甲（卷四四八·狐）／261李參軍（卷四四八·狐）／262汧陽令（卷四四八·狐）／263李元恭（卷四四九·狐）／264焦練師（卷四四九·狐）／265李氏（卷四四九·狐）／266章明府（卷四四九·狐）／267謝混之（卷四四九·狐）／268王苞（卷四五〇·狐）／269唐參軍（卷四五〇·狐）
 卷十九：270嚴諫（卷四五〇·狐）／271韋參軍（卷四五〇·狐）／272楊氏女（卷四五〇·狐）／273薛迴（卷四五〇·狐）／274辛替否（卷四五〇·狐）／275代州民（卷四五〇·狐）／276馮玠（卷四五一·狐）／277禰蘭進明（卷四五一·狐）／278崔昌（卷四五一·狐）／279長孫甲（卷四五一·狐）／280王老（卷四五一·狐）／281劉衆愛（卷四五一·狐）／282王黯（卷四五一·狐）／283孫甌生（卷四五一·狐）／284王璿（卷四五一·狐）／285李磨（卷四五一·狐）／286宋溥（卷四五一·狐）／287李棗（卷四五一·狐）／288忻州刺史（卷四五六·蛇）／289餘干縣令（卷四五六·蛇）
 卷二十：290張騎士（卷四五七·蛇）／291至相寺賢者（卷四五七·蛇）／292李齊物（卷四五七·蛇）／293嚴挺之（卷四五七·蛇）／294天寶樵人（卷四五七·蛇）／295海州獵人（卷四五七·蛇）／296檐生（卷四五八·蛇）／297蒲州人（卷四五九·蛇）／298戶部令史妻（卷四六〇·禽鳥）／299盧融（卷四六三·禽鳥）／300王緒（卷四六三·禽鳥）／301南海大漁（卷四六四·水族）／302鯨魚（卷四六四·水族）／303鯉魚鬪蛇（卷四六四·水族）／304南海大蟹（卷四六四·水族）／305謝二（卷四七〇·水族·水族為人）／306荊州漁人（卷四七〇·水族·水族為人）／307劉回彥（卷四七二·水族·龜）／308吳興漁者（卷四二七·水族·龜）／309崔元微／310元裝／311王生／312帝女桑／313鳳止棠